

## コラム 50— 満州国についての各種論評

リットン報告後、アメリカのグルー駐日大使は、満州国について、次のように述べています。

「日本はおそらく、満州に、この不幸な国が、かつて経験したことがない平和と安全と繁栄の政治をもたらすだろう。さらに日本は、現在の重大な問題であるボルシェヴィズム（共産主義）の東方への蔓延に対して、堅固な緩衝装置の役割を果たしている。たとえ日本に他には何も取り柄がなかったとしても、現在、中国を山火事のように席卷し、もし日本が手をつけなければ満州をもすぐにも侵しかねない共産主義に対して、日本が挑んでいる戦いについては、少なくともその功を認めなければならない。」

多くの欧米諸国代表は、日本の頭を押さえつけようとするあまり、ソ連の共産主義の脅威には盲目になっていたといえるのです。

ワシントン会議の米国代表ジョン・マクマリーは、自己のメモランダムにおいて、満州事変以後の日米関係について、次のように予言しています。

「満州事変という日本の武力行使を招いたのは、中国がワシントン会議の諸条約を無視した政策をとり、アメリカは中国を諫めるどころか、迎合してしまったためである。アメリカがこのまま中国にばかりに肩入れして、日本の言い分を無視し続けるならば、日米戦争が起きてしまう。そして、日本の徹底的敗北は、極東にも世界にも何の恩恵にもならないであろう。それは単に、一連の緊張を生むだけであり、ロシア帝国の後継者たるソ連が、日本に代わって極東支配のための敵対者として、現れることを促すに過ぎないであろう。」

日本政策研究センター代表の伊藤哲夫氏は、西尾幹二編集の「新・地球日本史 2」において、アメリカ国民の中国理解の低さと題し、次のように述べています。

「アメリカの中国最良のあまりの的外れが、その実態認識を歪め、アメリカを『親中反日』にし、それが日本への過度な干渉となり、ひいては日米戦争に至らしめた。また、アメリカの蒋介石に対する一方的な思い入れが、国民党の排外主義運動を免罪し、その背中を押し、ひいては満州事変の原因をも形作っていった。『安定と平寧』を保障するのは、あくまでも冷静な現実の認識のもと、力と力のバランスであり、それを執拗に追求する国家意思が必要であったのである。」

また、1933(昭和8)年9月のロンドン・タイムズ紙は、報道記事「独立後2カ年の満州国」として、次のように記述しています。

「外来の訪問客は、過去1カ年における満州国の財政上の迅速な進歩に驚くであろう。通貨は安定した。一文の値打ちもない旧軍閥の不換紙幣の洪水に悩まされていた満州国にとって、これだけでも計り知れない恩恵だ。満州国における在留外人は外国商権の将来に関して懸念を抱いていることは無論だが、大体日本人の施設に対して好感を抱いている。・中略・満州国は既成事実だと言わねばならぬ。2カ年前における日本の行動の是非は、極東の現状ないし将来に対して最早関連のない事柄だ。満州

は今や『啓蒙的開発』というのが最も適切な過程を経過している。」

1934(昭和9)年末の「イギリス産業連盟の調査報告書」には、満州国について、次のように記述されています。

「満州国住民は治安対策の向上と秩序ある政府を与えられている。軍による略奪と搾取はなくなった。課税制度は妥当なもので、公正に運営されている。住民は安定通貨をもつことができた。輸送、通信、沿岸航行、河川管理、公衆衛生、診療施設、医療訓練、そしてこれまで不足していた学校施設などの整備計画が立てられ、実施されている。こうしたことから満州国の工業製品市場としての規模と将来性は容易に想像することができる。近代国家が建設されつつある。」

大東亜戦争の戦中から戦後にかけて外務大臣を務めた重光葵は、著書である「昭和の動乱」において、満州国に関し、次のように述べています。

「シナは脅威の目を見張った。日本の冒険はただちに国家の破産を招来するであろうという列国の予言に反して、日本はますます強大となる威力を示した。シナ革命は、この威力ある日本を研究し、見習わなければならぬ、という気持ちになった。その気持ちは、ちょうど日清戦争後のシナ識者の心理に酷似するものがあつた。このために、シナから多くの留学生や見学者が続々と来日し、政治家、外交官の日本渡来も急に増加した。」

作家・拳骨拓史氏は、名越二荒乃助遺作「武士道のこころ」で、満州国に関連し、次のように述べています。

「旧満州に赴いた際に、1人の中国人の老女が話しかけてきて、私が日本人であることを知ると、『日本統治時代の満州国はすばらしかった。日本が満州帝国をつくってからは、満州では道端に財布が落ちていても誰一人、ネコババする人もいなかった。しかし、中国共産党軍が来てからは強盗殺人が起き、民心は廢れた。日本統治時代はすばらしい時代でした』と語ったのである。この言葉を聞いたとき、私は感動で全身がしびれる感覚を覚えた。大日本帝国は滅びた。だが彼女の中には現在もなお、大日本帝国は存在していたのである。」